中外新聞

外篇

九

定價一匁

西垣文庫
文庫10
7328
9

特 文庫10
7328
9

西園文庫

中外新閑外篇巻之九

慶應四年閏四月

中外新閑本篇第二十号ゟ買奴の事を論ぜしゟ今其禁令の出しゟ事を茲ゟ報告ス

頃日當地ゟおいて買奴の事生芽ーゟ其害未ざ蔓延せざーて二葉の内ゟ芟除うまたり日本人民の為ゟ祝ぎべき事あり都て東方諸国の貿易場ゟハ買奴の悪弊ならざるハ稀あり印度支那の如き習風豈恐るざらんや嗚呼憐むべーー且雇夫とあり買主の手ゟ落ち本国を離るゝ後ハ名ハ年期の約束ありとも生きて帰り来る事実ゟ難ーー方今日本ゟ於

る雇夫ハ全く黒奴賣買の事と異あらん近日或る知商ハ
りて日本人三百五十人を三ヶ年期にて雇ふ約束を為し其
内百五十人をハ既に船積してサントワンス島へ送り去るよ
と然るに亜国ミニストル此事を知りて自こゝ職務の権に
依て本国より兼ての命令を奉し後来如此事を厳禁する趣
の布告を為せり尤歎ぶべき事あり

○近藤勇死刑に処せる事

近藤勇

右ハ元来浪士にて初め在京新撰組の頭を勤め後江戸
に住居いつゝ大久保大和と変名し甲州并下総流山に於て
官軍に手向致し或ハ徳川の内命を受ハ朴と偽り唱へ不容
易企及ハ段上ハ　朝敵下ハ徳川の名を偽りハ次第其罪
数るに逞しくして仍て死刑に行ひ梟首せしむるもの也

四月

○近藤勇ハ其性剛邁にして殊に文武の道に長し曾て有志
の諸士を募りて新撰組と号し自ら其隊長となり数年来勤
王佐幕の志を以て四方に奔走し天下の為に力を尽せしが
此度不計　王師に抗するの罪によりて下総流山辺にて官
軍の為に捕られ四月廿五日板橋に於て死刑に処せられ

り実に惜へし此ものの近来名を改めて大久保大和又時と一
てい大久保剛と変名せし由あり

○上方よりの来翰中に得たる或人の建白書

方今　王政ハ一新の運に會それハアそ　王師の所嚮実
に無前未出数旬天下の大勢近んど定り特に海内のみあら
ず海外諸国駭然粛乎　皇威の可尊可畏を称するに至まり
然ともの物其満を極まハ必らず損其中に生ずと況や兵を凶
器あり好て其力を窮んとすハ大害おきもまさ必ちくら
らん抑徳川氏の罪状ハ之を當日に證跡あり其寃
あらとせん今□□強て恭順に終るといへども一回其寃を

伸ハ臣子の至情を尽さんと陰りに議するもの少とせず近
時政を失ふも未と其家を滅するの甚しきに至らず三百年
の久しき民心を結ぶも亦深し此未可滅社稷を奉し民心未
散の地に拠て伸寃を議するの人なるも粛く一夫の輕挙ふ
く君意に体認して謹慎を何そや近世文化開てより人々大
義を明に遠く外患の釁を慮り敢て道義に屈するゞ故也
豈是も時運にらしてせんや若し此時運を以て謀臣の所
畫と思ひ強て兵力を窮する時ハ禍或ハ不測に起らん歟且
閣會津の父子一に謹慎をといへども枉て寃を忍ふに意ふ
く臣民已に固結して土地と存亡を決せんとすと而して幾

多の諸侯あり又徳川氏の脱籍臣たり相連盟して伸寃の義を唱んとせし元より堂々たる海内の兵　天威を奉して是を討つに果然誅戮可歎も或い歳月弥久に渉り　王政は一新の初頭より多少の生血を東に濺ぎ徳化流通の道を塞ぎ許多の害を可釀且東方の　王澤に浴する事自古猶浅きに民情の向背未可知然るに今兵力を窮めて　皇威の満を張らんとせば愈東民の心を失ひ大に時運を損する事ならん、猶ほ一の大若し一朝不幸にして　王師筭を誤り錦旗西に還るの患なるあらい先邦内い姑く舍き　皇威嚴国に不遍皇化全民に不布を海外諸国より蔑視せらるに至らば今日

可尊可畏の大勢忽然として地に墜つべし茲に至て　皇国の大患初て端を成すに至らん故に能く今日の大事を處する者満を要ずに兵を窮めず至正至公の議を尽し善く其時運を養ひて実に　皇威をして餘ならしむるの事なるべし其道如何とかいて固より有力者の業にして僕輩卑賤の妄に議すべき所に非ずと雖ども僕已に　皇国の一民言忌諱に觸るるに非ずと雖ども微に憂国の志なり此生を難き世に生て苟も有思黙して何ぞ止べきや足下幸に卑陋を不捨左の条件を採て公議に附せい今日死して瞑目せん

○王政一新の大義を議する者い已に討幕の念を廃するに事計幕より起るに及び徳川を罪する或い過重に失し苟も過重あるに及べば寃ある能はず苟寃ならば怯夫も或い奮起せん況や會藩の如き者をや今日徳川恭順の実行已に明あり而して王家寛典の実行却つて未有立若し徳川の宗廟を廃滅せしむるに至らば是過重の罰にならざるべからざるを徳川の臣庶焉んぞ寃を訟へざるあるを得んや而して直に兵を進め愈奮起の會津を伐んとせば人或いはん事倒幕より起るものにして真に王政一新を謀るの義にあらざるなり故に今日の事一夫寃を訴へば万生至公の刑に伏する典を垂

れ早く徳川の家名を立且討會の兵を休め私憤を去て公義に就き薩長二藩の使臣を遣り會の重臣を召出して天下の大政を詳論し　王政一新の初められい殊に忠精を励まして共に　皇国を擁護奉ると誠意の説諭有之に於ては會津も元より忠臣の国なり必　皇恩の難有を戴き薩長二藩の友義を喜び君臣相率て　宮闕に走り不世の恩を奉謝べし已に會藩是に至らば其他の諸侯い不労寸兵各〻軍門に拜走し荊棘を負て罪を謝べし但其原兵を窮めば運を養ひ寛典らして恩威を立　皇化速に國国に普く　王政復古の大基本をして不拔不動の堅に居へ此　皇国をして早く

冨岳の安よはらしめん事を希ふ是と僕が卑願ふるのみ

辰四月下幹　　徳川逸民

　　某　拜具

此書或ハ曰友人前島来助大坂ニ於て参与某ニ呈せし建白ありと依て特ニ之を記載セ